4. 大学3年生 －1959年－

春季リーグ戦

不完全燃焼

前年の１年間はバックのお蔭で勝つことができ、１点に抑えた試合はわずかに２試合しかなく、その２試合は１勝１分であって、負けることはなかった。このシーズンは、私がチームに貢献する番であった。

開幕戦 －対立大戦－

１回戦は１対０での敗戦に終わる。完投して１対０で負けた最初の試合となる。被安打は５であって、負けて後悔をしなかった数少ない試合の一つとなった。

２回戦は９対０で惨敗。先発したが、毎回失点でKOされた。２年の時とは異なり、連投すると球威が落ち、その分打たれるようになっていた。落ちる球よりもシュートを得意球としたことによるマイナス面である。

３連戦 －対慶大戦－

続く対慶大１回戦は４対２で快勝。２点取られた樋爪を救援して、完璧に抑えることができた。

２回戦は５対１の敗戦。樋爪が先発し、私は勝負のついた後で、少しだけ投げている。

３回戦も７対０の敗戦。この試合も樋爪の先発であった。渡辺監督は、過去の実績から、慶大戦は私よりも樋爪が良いと考えていたようであった。しかし、この年の私のピッチングは、休養さえ十分であれば、慶大に通用するレベルになっていたのではないかと思う。

連敗 －対早大・法大・明大１回戦－

対早大１回戦は、私の完投で、７対０と惨敗。この試合、５インニングにわたって、毎回１点づつ取られている。２回戦も８対０と大敗。鈴木の先発で、私は勝負の決まった後に登板している。

続く対法大戦も５対２、７対０と連敗。さらに、対明大１回戦も６対０と破れた。私は３試合とも先発してKOされている。ここまで10試合を戦い、点を取ったのはわずかに３試合で合計７点、後の７試合は完封されている。

９勝目 －対明大２回戦－

次の対明大２回戦は、３対１の劣勢から、６回裏に一挙４点を挙げて、５対３の逆転勝ち。完投で私の９勝目となる。

次の試合は私の記憶に残る試合である。どうした理由かは記憶していないが、６月２日に行われている。前の試合が５月27日であるから、中５日の登板であった。０対０のまま延長戦となり、15回表

も０点に終わる。相手の明大は４回から池田投手が投げており、15回までの９回をパーフェクトに抑えられ、全く勝てるチャンスのない試合であった。ここで、時間の関係で東大の勝ちはなくなった。負けるか引き分けかである。私の気力は全く失せてしまい、サヨナラ負け。降板を申し出るべきところであった。

昭和34年春季リーグ戦の記録

私が登板するようになって以来、最も成績の悪いシーズンであった。無得点負けが８試合。２勝10敗で最下位となった。優勝は早大、これまで４連覇の立大は２位であった。私も２勝６敗と大きく負け越し、不完全燃焼のシーズンであった。

優勝	早大	９勝	３敗１分	４勝点
２位	立大	９勝	４敗２	4
３位	法大	８勝	５敗２	3
４位	慶大	７勝	７敗３	3
５位	明大	３勝	９敗０	1
６位	東大	２勝１０敗０		1

対立教

１回戦（４月11日）10敗目	立大	０００	０００	１００	1
（岡村）	東大	０００	０００	０００	0
２回戦（４月12日）11敗目	東大	０００	０００	０００	0
（岡村、樋爪、近藤）	立大	１１２	２２１	００X	9

対慶應

１回戦（４月18日）８勝目	**慶大**	**２００**	**０００**	**０００**	**2**
（樋爪、岡村）	**東大**	**０００**	**２２０**	**００X**	**4**
２回戦（４月19日）	東大	１００	０００	０００	1
（樋爪、岡村）	慶大	１００	１０２	１０X	5
３回戦（４月20日）	慶大	０５０	０００	０２０	7
（樋爪、鈴木、岡村）	東大	０００	０００	０００	0

対早稲田

１回戦（５月２日）12敗目	早大	１１０	０１１	０２１	7
（岡村）	東大	０００	０００	０００	0
２回戦（５月３日）	東大	０００	０００	０００	0
（鈴木、岡村）	早大	０２３	０００	３０X	8

対法政

１回戦（５月10日）13敗目	法大	０００	２０３	０００	5
（岡村、樋爪、鈴木）	東大	００２	０００	０００	2
２回戦（５月11日）14敗目	東大	０００	０００	０００	0
（岡村、鈴木）	法大	３１０	００２	０１X	7

対明治							
1回戦（5月26日）15敗目	東大	000	000	000		0	
（岡村，花村，鈴木）	明大	000	105	00X		6	
2回戦（5月27日）9勝目	**明大**	**010**	**011**	**000**		**3**	
（岡村）	**東大**	**000**	**014**	**00X**		**5**	
3回戦（5月28日）16敗目	東大	000	000	000	000	0	
（岡村）	明大	000	000	000	001	1	

秋季リーグ戦

好調な出足

私の投手生活において、最も技術的に高いレベルにあったのが、このシーズンである。1年生の春に蒲地先輩に教わった投球を完全に自分のものにでき、全力投球ができれば、調子の良い時には、ほとんど打たれる気がしないところまで成長していた。1点に抑えることを目標に置いた。

開幕戦 －対立大戦－

1回戦は2対0での敗戦。6回裏と8回裏に各1点を失い、完投しての惜敗である。2回戦は、1回裏と2回裏とに各1点を取り、8回表に1点を失うが、逆に2対1での快勝である。この試合も私の完投であったが、間に2日空いたのが味方してくれた。3回戦も先発したが、連投では速球の球威が落ち、早々にKOされて、5対1で破れる。

運命の一球 －対慶大1回戦－

私の投手生活で2点リードした試合を逆転された最初の試合となったのが、高橋の落球として記憶されている対慶大1回戦(昭和34年9月19日)である。得点3対1で東大2点リードの9回2死者一塁、慶大打者4番主将の高橋、カウント2ストライク1ボール。ストレートを3球か4球連続して後ろへファールしているうちの一つが捕手の守備範囲に上がった。これを高橋が珍しく落球したのである。捕っていれば、もちろん試合終了であるが、私は極めて好調であったので、このことに大した意味があるとは思っていなかった。高橋も同じであったと後に私に語っている。次のサインがカーブであった。

このカーブのサインに私は首を振らなかった。首を振ろうかと思ったが、迷った末に、サインどおりカーブを投げることにした。アウトコースにはずし，その次のストレートで討ち取ろうと思いなおしたのである。ところが、その球がストライクゾーンに入り、左中間のツーベースとなる。1点差となった。この試合では、2点リードした後、一度もタイニングランを背負ったことがなかった。セカンドランナーを見た時、ふと、このランナーがかえると同点になるという考えが心をよぎった。

迎えたバッターは代打の村木である。初球、二球とストレート。いずれも空振りでツーストライクとなる。次は当然ウエスト。私は、ウエストボールは高めのストライクゾーンいっぱいに投げること

にしていた。最も自信を持っている球であり、完全なボールを投げ、次の球で勝負するよりもはるかに討ち取る確率が高いからである。この高めのボール球を振り遅れで一二塁間を抜かれてしまった。同点である。万事休す。その後のことは覚えていない。

この２人のバッターに対して、私は多くの間違いを犯した。カーブのサインに首を振ってストレートを投げるべきであった。ストレートはすべて振り遅れており、ストレートを投げ続ければ最後には凡打に討ち取れるはずである。このような時にカーブを投げるとタイミングが合ってしまう。このことはもちろん解っていたので、カーブを投げるならば完全にはずすべきであった。また、投げる前に結果を考えるべきでなかった。最後に、勝を急ぐべきでなかった。これだけ間違いを犯せば、負けてもしょうがない。高橋には本当に悪いことをしてしまった。今でも悔いが残る。

この衝撃から立ち直れないまま、次の試合を迎える。この試合は先発鈴木が好投した。０対０で私が登板したが、２対０で惜敗。

３連戦　－対早大戦－

次の対戦相手の早大戦も先発鈴木は好投し、５回を終わってやはり０対０。しかし、後半に私と樋爪が大量点を取られて、７対０の敗戦。２回戦も、鈴木、岡村のリレーであった。この試合は、２対２で引き分けに終わる。３回戦は、私の先発で５回まで１対０とリードするも６回に３点を取られ、７対２の敗戦。

逆転負け　－対法大１回戦－

次の対法大１回戦も先発の鈴木は好投する。１点をリードして私に交代。６回裏には２点目を挙げ、７回終了時点で２対０とリード、勝利は濃厚となった。ところが８回表、無死から二人続けて四球を与える。続く二人は内野フライに討ち取ったものの、病気上がりの代打牧野にカーブをホームランされて負けてしまう。２点リードを逆転負けとする２試合目となる。

次の試合は１対０での敗戦。完投によるこの年三度目の１対０の敗戦である。この１点も走者を一塁において、牧野にカーブを三塁打されたものである。同じ間違いを何度でも犯す自分が分からない。牧野を打席に迎えて、前日の敗戦を思い出し、全く冷静さを失っていたのである。

ノーヒットノーランを逸す　－対明大戦－

次の明大１回戦は、先発鈴木が早々に打たれたので、私は登板していない。試合は７対１の惨敗。

対明大２回戦も忘れられない試合であった。私はノーヒットノーランを逸し、鈴木に助けてもらった試合である。この試合、９回明大の攻撃は７番代打の山下からであった。４回２死から四球で出した岩井の盗塁を高橋が刺してくれ、それ以外には一人のランナーも出しておらず、残塁ゼロできたからである。それまで、球が良く切れている代わりに、自分の球が制御できず、ほとんどの球は真中低めを狙って思い切り投げるだけというピッチングであった。ストライクゾーンのどこに行くかは、私はもちろんバッターも分からない。私の１つの勝ちパターンである。

味方の得点は３回に１点、９回表に１点の計２点。この２点目が私にとっては裏目に出た。何しろ自分の球がどこにいくか分からないというのは、打たれなくとも不安なものである。１点差であれば，それでも全力で投げ続けるほかにみちはない。ところが２点目が入ると、確実に勝ちたくなるのが当

時の私の精神状態である。自分の所為でゲームを落とし続けてきたことが、重くのしかかってきていた。四球を出さなければ勝てる。ところが先頭バッターに死球を与えてしまった。例によって，明治のバッターは，私のインコースを逃げずにぶつかってくる。続く２人のバッターには、それまでほとんど使わずにきたカーブを混ぜて討ち取り、ツーアウトになった。カーブであれば確実にストライクが取れるからである。

次は１番の古海。一球目のカーブを三遊間にゴロのヒットを打たれてしまった。そして、代打の辻にまでヒット。何を打たれたかは覚えていない。１点取られて、一塁三塁。そこで、渡辺監督が登場。投手交代である。キャプテンの片桐は、鈴木に代えると盗塁されて、逆転のランナーが二塁に行くからという理由で交代に反対した。私は自分が投げるよりも鈴木が投げたほうが勝つ確率が高いので交代したほうが良いと判断してマウンドを去った。後で聞くと、渡辺さんは私が反対しても断固交代させると固く決心をして、マウンドに来たそうである。

鈴木は例によって、アウトコーススライダーの連投である。時速100 km位のスピードだと思うが、全く落ちず水平に曲がる不思議な球である。これを３番岩井はレフトの左にフアールする。スライダーを投げる。レフトの左にフアールする。スライダーを投げる。レフトの左にフアールする。これの繰り返しがいつ果てるともなく続いた。10球を越えたところでついにレフトの守備範囲に上がり、ゲームセット。後で鈴木から聞いた話では、高橋はサインを出さない、スライダーだけを投げろと指示したそうである。もちろん、鈴木もそのつもりであったという。二人の自信と根気の勝利であった。

私はいまでも、ノーヒットノーランを狙っていたらできていたと思っている。３個の四死球を覚悟し、鈴木のように自分を信じて，ストレートを投げつづけていたならば、ヒットを打たれることはなかったと。また、９回の１点がなければ、やむを得ずそうしていただろうと。その時は、ノーヒットノーランをする機会はいずれくるだろうと思っており、それを逸したことは試合後あまり後悔しておらず、鈴木のお陰で勝てたことを心から喜んでいた。ところが、二度とそのような機会は訪れず、今となっては残念な思い出となった。

次の試合は、先発して５対２で破れる。悔い多いシーズンがこれで終わった。

昭和34年秋季リーグ戦の記録

２勝10敗１分で最下位となったが、このシーズンほど悔いの多いシーズンはなかった。優勝決定戦で早大を破った立大が優勝した。私も２勝７敗と最悪の記録となった。

優勝	立大	８勝	３敗０分	４勝点
２位	早大	８勝	３敗１	4
３位	慶大	７勝	４敗０	3
４位	明大	６勝	５敗１	3
５位	法大	２勝	８敗１	1
６位	東大	２勝１０敗１		0

対立教

1回戦（9月12日）17敗目	東大	000	000	000	0
(岡村)	立大	000	001	01X	2
2回戦（9月15日）10勝目	**立大**	**000**	**000**	**100**	**1**
(岡村)	**東大**	**110**	**000**	**00X**	**2**
3回戦（9月16日）18敗目	東大	000	001	000	1
(岡村、鈴木)	立大	210	000	20X	5

対慶應

1回戦（9月19日）19敗目	慶大	000	100	003	4
(岡村、鈴木)	東大	000	102	000	3
2回戦（9月20日）	東大	000	000	000	0
(鈴木、岡村)	慶大	000	000	02X	2

対早稲田

1回戦（10月3日）	早大	000	002	032	7
(鈴木、岡村、樋爪)	東大	000	000	000	0
2回戦（10月4日）	東大	001	000	010	2
(鈴木、岡村)	早大	010	100	000	2
3回戦（10月6日）20敗目	早大	000	003	400	7
(岡村、花村、滝川)	東大	100	001	000	2

対法政

1回戦（10月10日）21敗目	法大	000	000	031	4
(鈴木、岡村)	東大	010	001	000	2
2回戦（10月11日）22敗目	東大	000	000	000	0
(岡村)	法大	000	100	00X	1

対明治

1回戦（10月24日）	明大	201	112	000	7
(樋爪、花村、滝川)	東大	000	000	010	1
2回戦（10月25日）11勝目	**東大**	**001**	**000**	**001**	**2**
(岡村、鈴木)	**明大**	**000**	**000**	**001**	**1**
3回戦（11月3日）23敗目	明大	020	101	001	5
(岡村、鈴木)	東大	010	000	100	2

神宮の花形

打たれてもゆうゆう

二回には2点目たたく

立教大から勝ち星を挙げた試合（昭和34年秋・P27 参照）

岡村、準完全試合逸す

九回、古海に惜しい一発

明大 0 0 0 0 0 0 0 0 0 — 0
東大 0 0 1 0 0 0 0 0 1 — 2

"よかったシュート"

九回は"魔の回"と謙虚

岡村投手

惜しくもノーヒットノーランを逃した東大岡村投手

対明大戦 ノーヒットノーランを逃した試合（昭和34年秋・P28 参照）